

派遣労働の先行形態としてのギャングシステムと工場内請負制について

—親方制と資本主義の発展に関する試論—

高田好章（所員）

[報告要旨]

現代の資本主義において一般的にみられるようになった派遣労働、特に製造業の製造ラインにおける派遣労働である製造派遣を研究するにあたって、その先行する形態を顧みることの一つの重要な論点である。ここでは、資本主義勃興期である産業革命期から20世紀初頭まで長く続く様々な形で見られたギャングシステム[gang system or butty system]および工場内請負制[sub-contracting system]を中心に、親方制と資本主義の発展に関する試論として考察する。

派遣労働という「間接雇用」が現代の資本主義に特異な労働の在り方ではなく、そもそも資本が場合によっては取りうる雇用形態であり、それが現代の資本主義において派遣労働という形で存在している、ということができる。この「間接雇用」は、資本主義勃興期には、ギャングシステム（労働隊制度・作業隊制度あるいは親方制、ganger:親方、集団労働制(堀江栄一)は正確ではない)、あるいは工場内請負制（「二重雇用制」(堀江栄一)あるいは「共同搾取[Co-exploitation]」(E.J.Hobsbawm)とも称される）がそれにあたる。

マルクスは『資本論』の第1巻「資本の生産過程」において、ギャングシステムと工場内請負制を以下の箇所にて記述している。第19章「出来高賃金」では、資本家と不熟練労働者とのあいだへの寄生者の介入があり、資本による労働者の搾取は、労働者による労働者の搾取を介して実現される、と記述し、親方制度[mastring]としての工場内請負制を取り上げている。また、ギャングシステムについては、第13章「機械制と大工業」の第3節「労働者におよぼす機械経営の直接的影響」の「a 資本による補助労働力の取得 婦人・児童労働」の一部分に医師の報告の中に出てくるが、本格的な記述としては、第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」の第5節「資本主義的蓄積の一般的報告の例証」において、「e 大ブリテンの農業プロレタリアート」の「12 ウースタシャ」に、農業における労働者集団として農場を渡り歩いて移動するギャングシステムについて詳しく記述している。また、ギャングシステムの用語は出てこないが、同じ章の「c 移動民」の記述は、工業部門で移動労働する人々を描いていて、建設・鉱山・煉瓦製造・石灰製造・鉄道敷設の状況を述べていて、内容的にはギャングシステムを書いている。このように、ギャングシステムとは不熟練労働者達を親方がまとめた集団であり、マルクスは農業労働者を取り上げているが、マルクスの時代において、またその後も、我々が問題としている製造業において工場内請負制としてのギャングシステムが存在していた。マルクスは『資本論』では資本家の下で働く労働者を労働力として分析することにより、搾取の問題を取り上げ、そこでの賃金支払いについても述べてはいるが、しかし具体的な賃金の支払いは「資本」の部ではなく、「賃労働」の部で説明すると述べているように、同様に雇用の問題も必要な限りで述べているだけで、具体的に誰に雇用されて働いているかまでは当面は分析の対象にしてはいない。

そもそも親方制は確かに中世以来の徒弟制として存在していたが、産業革命により大きく変貌を遂げる。農民層分解による産業予備軍の形成とともに、多くの未熟練労働者はどのように新たに勃興した工場へと吸収されたのか。産業革命によっていきなり大きな機械体系の工場ができたわけではない。それまでの問屋制による家内工業的な小さな工場が、新たに出現した大きな工場内部に持ち込まれて下請関係に入っていく、熟練工が親方になり、彼の周りに未熟練工を抱え込

むようになる。これがイギリス産業革命期に見られた工場内請負制の姿である。産業革命において近代的な機械制工場制度として初めて存在した綿業工場において、ミュール精紡機の熟練工である紡績工が工場主に雇用されながら、彼が親方として多くの未熟練労働者、特に年少者・婦人を彼の下に雇用するという工場内請負制が存在していた。それはミュール精紡機がそもそも持っている技術的要件であった。熟練工は工場主と出来高制で契約を結び、彼が雇用する未熟練労働者には時間給で賃金を支払い、出来高と時間給の差額が熟練工の第二の儲けとなるため、かれは一定の時間内のできるだけ多くの出来高が上がるように、労働強度を強めたし、それがまた間接的に工場主の儲けの拡大にもつながっていった。ここでの搾取は、目に見える搾取としての収奪である。それは現代の派遣労働に通じている。また、熟練工と未熟練工との間に労働組合運動における分断をもたらす。そのことでも、派遣先企業の労働者と派遣労働者の間の分断を思い描くことができる。

この綿業工場における工場内請負制はイギリスにおいては、マルクスが生きた時代である19世紀に、それも19世紀末が一番支配的であって、その後も第一次世界大戦後まで存在したという。綿工業以外の産業では機械工業、製鉄業、炭鉱業においてギャングシステムがあった。ドイツやアメリカ特に資本主義発展とともに広がって行った鉄道敷設では請負人の下にギャングシステムが活躍している。それはイギリスだけでなくドイツ・フランス・アメリカでもギャングシステムで鉄道敷設が行われている。これを建築業とともることができるが、製造業に限ってみても、ドイツの機械工場にも、またアメリカでは同様の工場内請負制が20世紀初めまで見られ、資本による労働力の完全な包摂はできず、それはテイラーによる科学的管理法を待たねばならなかった、という。また、日本においてはこの親方制を封建遺制として語られることがあるが、戦前の製造業でもイギリスと同様の工場内請負制を取っていたことは、考慮すべき事項である。このように鉄鋼産業や造船業にみられることは、戦後の鉄鋼産業等における社外工問題まで続いていくものである。

ここで重要なことは、イギリスにおいて未熟練労働者を中心とした労働組合運動の初期の闘いである。すなわちこのような請負制への反対運動が、19世紀末に熟練工が集まったいわゆる旧労働組合から未熟練労働者が加わった新労働組合への進展によって、一般労働組合[General Union]によって闘いの要求事項に掲げたことである。特に有名なのが、1889年のロンドン・ドッグ・ストライキで、港湾労働者は請負制廃止を要求の一つとして掲げ、直雇用を闘い取った事実である。この請負制が労働組合のストに対するスト破りとして利用されていたこともその要求の背景になっている。すなわち、資本主義の一般法則は古い徒弟制度であってもそれを利用できるのであれば、自らの制度の中に取り込み、労働強度を強める手段となっていた。それに対して、労働者は労働組合として自らの闘争によって請負制度を廃止し、直雇用を勝ち取ったのである。労働者をできるだけ安く、さらに無権利にして使う、という資本主義そのものに持っている法則に対抗するには、上記の請負制への労働組合の反対運動が貴重な経験である。それがまた先祖がえりするように派遣労働として労働隊（作業隊）が復活した。端的に言えば、それに対する抵抗勢力がないから、すなわち労働組合の勢力が弱いから古い形態が復活した、と言う事ができる。

1990年代から2000年代にかけて社会で大きく問題とされた偽装請負、すなわち工場内業務請負に関連して考えるならば、資本主義の勃興期から様々な形態をとって工場内での製造請負が行われていたことを見るならば、今日の資本の動きがそのような方向をとることは不思議なことではない。製造派遣はギャングシステムの資本主義的再編の一つの姿とすることができる。ただし、ギャングシステムと今日の製造派遣を同じと考えるのは早計である。ギャングシステム

には熟練工という親方がいた。少なくとも彼は自分の下にいる労働者にたいしては、一緒に労働現場で働く事によって最小限の雇用責任は取っていたであろう。しかしながら、今の労働派遣にはそのようなことはなく親方は存在せず、換言すれば親方による職業訓練もなく親方の庇護もなく裸のまま労働現場に放り込まれ、最低限の雇用責任である使用者責任が置いてきぼりになって、派遣労働者は働いている。かつての親方は人材ビジネスの経営者となり、彼はもう労働者でもなく、労働の側には立つこともなく、製造派遣は資本による巧妙なる再編成とすることができる。

さらに、問題提起をすれば、かつてのロンドン・ドッグ・ストライキに照らしてみれば、今の正社員を中心とする労働組合は、かつての旧労働組合である。製造現場で製造派遣や偽装請負があっても、自分達の問題ではないとして決して立ち上がりえず、到底抵抗勢力となりえずこれほどまでに製造派遣の広がりや許してしまっただけで、ということになる。新たな労働保護立法が保護されない労働者群に広げられると、それを避けるように新たな労働者群を作り出すというのが、これまでの資本主義の歴史が示している事実である。それに対する労働者の運動の未来図は、かつての新労働組合と同様に未熟練労働者だけではなく非正規労働者を含めた、それも雇用主の異なる派遣もふくめた労働組合運動の方向に向かうことによって、初めて製造派遣の問題が労働運動の真の要求事項となる可能性がある。

参考文献：

K. マルクス『資本論』第1巻

『堀江英一著作集』第4巻、青木書店、1976/06、特に「II イギリス工場制度の成立」

堀江英一編著『イギリス工場制度の成立』ミネルヴァ書房 1971/10

モーリス・ドップ『資本主義発展の研究』II、岩波書店、1955（原書1946）

E・J・ホブズボーム『イギリス労働史研究』ミネルヴァ書房、改訂版1984

E.J.Hobsbawm "Labouring Men : Studies in the History of Labour" Weidenfeld and Nicolson, London 1964/1968 : 上記の原書

G.D.H.コール『イギリス労働運動史・II』岩波書店、1953

前川嘉一『イギリス労働組合主義の発展』改訂版、ミネルヴァ書房、1965、1967-09 改訂版

戸塚秀夫『イギリス工場法成立史論—社会政策論の歴史的再構成』未来社、1966

永田正臣編著『産業革命と労働者』ミネルヴァ書房、1985年

飯田鼎『社会政策の基本問題』亜紀書房、1987/8/

中川敬一郎「イギリス綿業における工場制度の成立」(大塚久雄編『経済史学論集』河出書房新社、1962) (初出論文：『経済学論集』1951-52)

大野英二『ドイツ資本主義論』未来社、1965

井上 忠勝「工場制度成立期における内部請負制度について」経営学論集27、1956-07

井上忠勝「内部請負制工場制度について」国民経済雑誌（神戸大学）92(2)、1955-08

井上忠勝「アメリカ紡績機械工業成立期における請負組織制工場制度—工場制度成立期における工場組織についての一研究」企業経営研究年報（神戸大学経済経営研究所）5、1955-02

角山栄『産業革命の群像—現代社会の原点をさぐる』清水書院、1971

藤本武『組頭制度の研究—国際的考察—』労働科学研究所、1984-03

山本潔『日本における職場の技術・労働史1854～1990年』東京大学出版会

間宏『日本労務管理史研究—経営家族主義の形成と展開』御茶の水書房、1978/06